

吃安こと俠客竹居安五郎

山口正義

筆者が所屬している古文書研究会で嘉永六年（一八五三）の五日市村（東京都あきる野市）の御用留の勉強をしていますが、その中に流罪地の新島を島抜けして逃亡した（伝達の）文章があります。その大胆な行動に驚き、興味を持ち少し調べてみました。御用留の概要は、

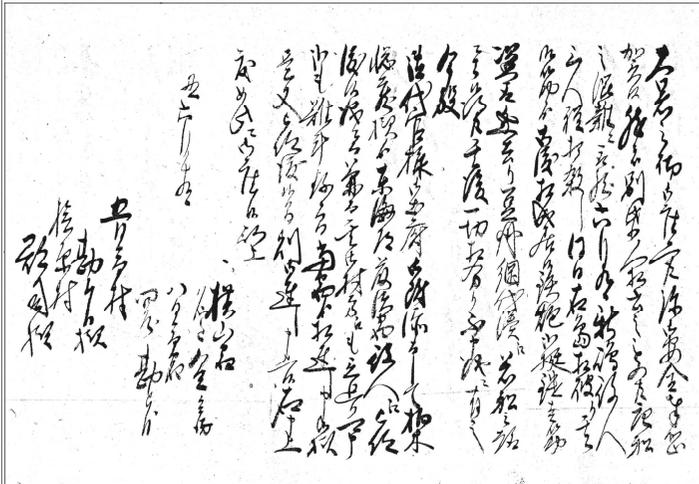
「嘉永六年六月九日唐船の混雑に紛れて流人たちが新島役人を三人程打殺し島を逃げ去った。実行したのは安五郎・丑五郎・貞蔵・造酒蔵・角蔵・源次郎・長吉の七人。鉄炮二挺鎗一筋を奪い網代湊に着船したが、その後一切分からない。江川太郎左衛門手代柏木捨蔵から藤沢宿役人へ通達があり、云々」

というようなもので、日付は六月十九日とあり、七人の人相書きもあります。主謀者安五郎の人相書は「甲州竹井村無宿安五郎、年四十二才、顔長く色浅黒し、丈高ク屋セ形チ、口大キク鬚有、背中右より左へ懸ケ古キ七寸程之突疵之跡有之」とあります。また、「大館村無宿丑五郎、河内村無宿貞蔵、武州埼玉郡附宿之内市宿町百姓音五郎弟源次郎、万光寺村無宿造酒蔵、草加宿無宿入墨長吉」ともあります。

「竹井安五郎」でネット検索すると「竹居安五郎」についての情報が得られます。安五郎は甲州竹居村（笛吹市）出身の有名な俠客で、島抜けの身ながら郷里の竹居村に戻った安五郎は村のために九年余り活躍したようです。その概略は少し長いですが次のようなものです

甲斐国八代郡竹居村生まれ。本名は中村安五郎。中村家は名主を務めた家柄。安五郎は四男。父の甚兵衛は無宿人を取り締まる郡中総代。どもりがあり、竹居の吃安とも。

嘉永六年六月八日深夜、安五郎ははじめとする流人の七人が新島からの島抜けを行う。伊豆国を管轄する葦山代官所が黒船来航の対応で忙殺されているなかの出来事であった。島抜けに際して島役人宛に残した「書置申一札之事」（新島村博物館所蔵）によれば丑五郎・貞蔵・角蔵の三人は前年の嘉永五年四月十五日に島抜けを決意し、安五郎に計画を持ちかけたという。島抜けの当日深夜、七人は新島の名主・前田吉兵衛宅を襲撃し吉兵衛を殺害、孫の弥吉を縛り上げ負傷させると、吉兵衛宅から鉄砲を入手した。さらに一行は島民の市郎左衛門・喜兵衛宅を襲撃し、水主である両名を拉致する。ここでも丑五郎は殺人を行っている。一行は漁船を盗むと島抜けを敢



嘉永6年御用留より（解説文は左）

大暑之砌御座候へ共弥御安全奉恐賀候然者別紙人相書之もの共唐船之混雑ニ取紛六月九日新嶋役人三人程打殺し同日右島相破り其御筋方御渡相成居候鉄炮式挺鎗老筋盗取逃去り豆州網代湊江着船之趣ニ而候得共其後一切分り不申儀ニ有之今般

御代官様御出府御附添与して柏木捨蔵様方東海道藤沢宿役人江被仰渡候儀ニ而兼而其御村方江も立廻り可申哉も難斗存候間当宿方相達し申候様是又被仰渡候間則御達し申上候右申上度如此ニ御座候以上

嘉永6年御用留解説文

- 横山宿
- 名主金兵衛
- 八日市宿
- 問屋勘右衛門
- 五日市村
- 勘兵衛様
- 榎原村
- 郡司様
- 丑六月十九日

行し、網代に上陸した。

網代から安五郎は甲斐境村名主の天野海蔵や伊豆田方郡間宮村の博徒大場久八の助力を得て、駿州往還もしくは富士山麓の中道往還で甲斐へ逃げ帰ったとされる。

帰郷後は黒駒勝蔵らの子分を得て故郷竹居村を拠点とした博徒として復帰するが、関東取締出役や石和代官に追われ、文久元年（一八六一）に国分三蔵や祐天仙之助、上野の浪人犬上郡次郎の奸計により石和代官所に捕縛される。翌年三月に甲府堺町の牢に移され牢内で死去。享年五十二。墓は常在寺、浄源寺、仏陀禅寺の三箇所にある。

「無宿人を取り締まる家柄の出」、「島抜けに際して残した古文書の存在」、「故郷に帰り九年余りの活躍」、「三つの墓」、何れも刺激的です。この文章の参考文献に『博徒の幕末維新』（高橋敏、ちくま新書）というのがあるので購入してみました。最初に書かれていたのが趣意書「書置申一札之事」。その概要はこうです。

「丑五郎・貞蔵・角蔵の三人は去年の四月に島抜けを計画し、十月に安五郎に計画を持ちかけたところ納得したので、引き連れていく仲間に（造酒蔵・源次郎・長吉を加えた。当所の百姓は島抜けに必要とあらば手当り次第に人足に遣うので承知下さい。また市郎左衛門と弥次右衛門の二人の流人に対する身分不相应の不届きは目に余るので見せしめに討ち果たす。さらに再々抜船の相談をして来たのでその中から自訴するものがあればそれらも討ち果たすので、厄介であるうが死骸の取片付方を頼みたい。六月今晚 丑五郎・貞蔵・角蔵 嶋役人」

この文章力や筆致にも驚くが、これは明らかに役人への挑戦状、正に「事実は小説よりも奇なり」です。それにしても安五郎は何故逃げる事ができ、九年余りの活躍が出来たのでしょうか。

この時期、黒船の来航に幕府は狼狽、混乱の最中にありました。この時の幕府の対応はご存知の大筒の製造と砲台の台場築造であり、先頭に立って対応せざるをえなかったのが江川太郎左衛門でした。勿論手代の柏木捻蔵らも含めて島抜けに対応する余裕はありませんでした。それどころか、緊急を要する台場工事の多人数の人足手配では、天野海蔵を通して博徒の大場久八に頼ることになります。海蔵と安五郎は旧知の仲で、捻蔵と久八は腐れ縁の仲でもあったといえます。安五郎の逃亡はこういったことが陰に陽に影響したのは想像に難くありません。

それにどうも土地柄が影響しているような気がしません。笛吹川は昔から洪水が多く、その為か竹居村辺り



「書置申一札之事」

(新島村博物館から原文のコピーを送って頂きました)

書置申一札之事

一私共義去年四月十五日より此度
之一件相談合きまり昨年十月十
八日安五郎江右之趣掛合ニ及候處右
安五郎得心仕方此度率つれ候
者共へ段々手當等致此度為致供候
且亦当所百姓共之義者手当り次第
人足ニ遣候間左様御承知可被成候尚亦
当嶋ニ置而市郎左衛門弥次右衛門之義者
流人共相手ニ致身分不相应之働益々
不届目ニ餘り通難候間見せしめ之為
打はたし申候扱亦再々抜船仕候相談
致其中より出ちうしん仕候者共まゝ
有之故右之者共ヲも打はたし申候間
御厄介ニ者候得共死取かた付頼入申候
右之趣如斯ニ御座候

六月今晚 丑五郎
貞蔵
角蔵

嶋役人

「書置申一札之事」の解説文（古文書研究会で解説しました）

は争いごとが多かったようです。この辺りを知る友人によれば、戦後になっても水争いのあった土地とのことでした。そういう争いの素地があるから任侠・博徒が育つ環境にあったのかも知れません。三つの墓は何れも笛吹市の石和近辺にあり、訪れてみました。戒名・年月・建立者はそれぞれです。

常在寺の墓は「心誠院諦悟日道信土 嘉永七年十二月五日安五郎墓 竹居村石原市五郎建立」とあります。市五郎は子分です。嘉永七年は潜伏している時期で役人の追跡をかわす偽装工作として建てられたのではないかともいわれます。浄源寺の中村家の墓は「鐘嶽玄徽居士 文久二年二月十七日 中村甚兵衛建之」。この日は捕縛され入牢した年月日で、その日を死亡日として記されたものらしいです。仏陀禅寺の墓石は最初、牢屋に近い接慶院にあったが廃寺となり、一九六六年に移されたと標識にあります。「心岳宗安禅定門 文久二年十月六日」。文久二年三月十二日までに入牢していたことが確認されているとして、この日付が本当に亡くなった日ともいわれます。何れにしても数奇な運命を物語るようです。因みに地元には「竹居の吃安」「黒駒勝蔵」といった銘柄の日本酒もありました。

安五郎以外の六人のその後は、源次郎・造酒蔵・貞蔵は捕縛され処刑されましたが、丑五郎・角蔵・長吉は結局不明だったようです。

さて、前述の趣意書「書置申一札之事」については二つの疑問があります。その一つは何故このような文書を遺したのかということ。名主らの罪人に対する仕打ちへの怒りから、島抜けに際して憂さ晴らしに書いたというのが一つの解かも知れませんが、果たしてそれだけだろうかとの思いがありました。もう一つの疑問はどのようにしてこの文書が後世に遺ったのかということでした。

最近、『裏返しお旦那博徒』（高橋直樹、文藝春秋、2001年）という小説を読みました。主人公はまさに「竹居の吃安」安五郎です。この小説の島抜けは次のように展開します。

まず島抜けの計画を最初に考えたのは丑五郎です。極秘に仲間を増やそうとしますが、自分は「頭かしら」になる能力はないと考え、安五郎に頭になってくれと懇願します。秘中の秘の中で丑五郎は自ら書いた趣意書を安五郎に見せます。

趣意書から眼を上げた安五郎へ、丑五郎は強く言い切った。

「そいつを旦那へお預けすれば、あつしの命をお預けしたことになりやす」

「たしかに預かった」

こうして安五郎は島抜けの頭になったという訳です。はじめの疑問が解消したような気がしました。丑五郎は安五郎を説得する為にも書いたのに違いないと思いました。

島では安五郎は「裕福」に過こして、常吉という下男（勿論罪人）も使っていました。島抜けの決行時この常吉に見られてしまったため、決行の最中常吉を縛り上げ同行させていた。いざ島を離れるその時に、

最後に（船に）乗り込んだ吃安が、別れぎわに常吉へ一通の書付を渡した。丑五郎の趣意書だ。一味全員の名を書き加え、公儀への声明文とした。「世話になったな」



仏陀禅寺の墓



浄源寺の墓



常在寺の墓

吃安は「行っていいよ」と肩を押し、常吉は趣意書をふところに入れて、一目散に駆けだした。

これなら後世に趣意書が遺るのもわかります。作家の創造力は凄いつつも、案外事実に近いかも知れないと思いました。

〔古文書はむら〕第8号、平成28年3月）を追記